

Title	デザイン論としてのドイツ改革庭園研究
Sub Title	The research on German reform garden as a design theory
Author	後藤, 文子(Goto, Fumiko) Wimmer, Clemens Alexander() Schneider, Angelika() Metzger, Folker()
Publisher	
Publication year	2025
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2024.)
JaLC DOI	
Abstract	第一に、改革庭園期の前衛芸術家において、庭園をつくる行為 (gardening) が自己省察的な芸術制作と生存への問いかけに跨り、互いに表裏一体で本質的な意義をもつ事実を解明した。そこでは植物という生命的存在が同時代の自然科学的関心を芸術制作に媒介し、それへの批判とその刷新を促す重要な要因であった。第二に、「デザイン」の問い直しを必要とする視座が獲得された。彼らのガーデニング行為は、行為に特有の流動性ゆえに、従来「デザイン」を特徴づけてきた「芸術」と「生活」という対立的な二項に関して、むしろそれら双方に跨る「境域」の重要性を示唆し、そのあり方や関係を組み換える可能性を示している事実を明らかにした。 First, it was clarified that for the avant-garde artists of the Reform Garden period, including Kandinsky, Klee, Hoech, and others, gardening was an act that spanned self-reflective artistic creation and questioning of existence. These artists demonstrated the intertwining and significance of these two aspects. In this context, plants served as a medium through which contemporary scientific interest in nature could influence artistic creation. Thus, plants became a crucial factor in critiquing and renewing the artistic creation process. Second, a new perspective has emerged that calls for reexamining the concept of "design." Due to the fluidity of behavior, their actions reveal the importance of the boundary between the opposing concepts of "art" and "life," which have traditionally defined design. They also suggest reconfiguring these boundaries and their relationships.
Notes	研究種目：基盤研究 (C) (一般) 研究期間：2022～2024 課題番号：22K00186 研究分野：美術史学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_22K00186seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 7 年 6 月 3 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2022～2024

課題番号：22K00186

研究課題名（和文）デザイン論としてのドイツ改革庭園研究

研究課題名（英文）The Research on German Reform Garden as a Design Theory

研究代表者

後藤 文子 (Goto, Fumiko)

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：00280529

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：第一に、改革庭園期の前衛芸術家において、庭園をつくる行為（gardening）が自己省察的な芸術制作と生存への問いかけに跨り、互いに表裏一体で本質的な意義をもつ事実を解明した。そこでは植物という生命的存在が同時代の自然科学的関心を芸術制作に媒介し、それへの批判とその刷新を促す重要な要因であった。第二に、「デザイン」の問い直しを必要とする視座が獲得された。彼らのガーデニング行為は、行為に特有の流動性ゆえに、従来「デザイン」を特徴づけてきた「芸術」と「生活」という対立的な二項に関して、むしろそれら双方に跨る「境域」の重要性を示唆し、そのあり方や関係を組み換える可能性を示している事実を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、人間の生存に深く関わる「ガーデニング（gardening）」という人間の「行為」に独自の観点から着目し、芸術学・デザイン学上の意義を解明した。その意味でも本研究の学術的意義は、概して庭園にそれ自体としての諸特性を追究してきた従来の美術史学・庭園史学・園芸史学等のあり方を問い直し、研究的視座を組み替える成果を得た点に認められる。さらに、近代芸術家の創造的な制作活動にとってガーデニング行為が、芸術（美）の創出とは異なる倫理的行動・実践としての規範性を本質とする事実を浮かび上がらせた。このことは芸術のあり方を社会・生活との「境域」に問い、問いを社会に拓くゆえに、社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：First, it was clarified that for the avant-garde artists of the Reform Garden period, including Kandinsky, Klee, Hoech, and others, gardening was an act that spanned self-reflective artistic creation and questioning of existence. These artists demonstrated the intertwining and significance of these two aspects. In this context, plants served as a medium through which contemporary scientific interest in nature could influence artistic creation. Thus, plants became a crucial factor in critiquing and renewing the artistic creation process. Second, a new perspective has emerged that calls for reexamining the concept of "design." Due to the fluidity of behavior, their actions reveal the importance of the boundary between the opposing concepts of "art" and "life," which have traditionally defined design. They also suggest reconfiguring these boundaries and their relationships.

研究分野：美術史学

キーワード：庭園芸術学 デザイン論 制作論 ガーデニング 改革庭園

1. 研究開始当初の背景

美術史学研究における庭園芸術研究の方法論に対して、庭園史学・園芸史学を専門とする研究者を中心に 1980 年代より新たな視座に立った研究の必要性和重要性が提起されてきた。建築様式史的庭園芸術研究を批判的に反省し、それに代替する新たな方法論として、庭園に植栽された個々の植物に固有な特性を視野に置き、そこから庭園芸術を検討する「植物利用 (Pflanzenverwendung)」重視の研究アプローチである。今日までにドイツでは膨大な実証研究の蓄積がなされ、庭園芸術研究に従事する誰もが参照する一つの重要な学術領域と認められている。しかしながらそれら庭園史・園芸史研究には、近代芸術研究に特有の視座や問題意識の欠落も認めざるを得ない。申請者は近代芸術研究の立場から、両者を架橋する新たな視座と方法論の必要性を自覚してきた。本研究は以上を学術的背景とし、次の視座を前提として構想された。すなわち、19 世紀後半に登場して 20 世紀へと展開する「デザイン」を中核とする視座である。「デザイン」の重要性は、分化した生活世界（合理的科学的知識／倫理実践行為／感性的イメージ）の総合性・横断性の再構築を目指した点に認められる。それは「生産、集団、計測、機能的形成」によって基礎づけられ、「有用的価値」を受容の規範とし、「社会的情報、生活世界、日常性」を肯定する。それゆえ「デザイン／デザイン作品」は根本的に、「創作、個人、過程、美的形成」によって基礎づけられ、「美的・感性的価値（＝精神的価値）」を制作の規範として日常性を批判する「芸術作品」とは対照的である。この点を踏まえて近代の庭園芸術を「デザイン論」として問うことは、それを芸術作品に内在的な問題（様式論、意味論）として問うのとは異なり、生活世界を構成する多様な関係のうちに質的差異の本質を問いかける人間の創造的で総合芸術的な営みとして庭園芸術を措定することを意味する。これが、本研究の背景から導かれた学術的な問いであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1900 年頃にドイツで登場する「改革庭園 (Reformgarten)」と近現代芸術の相関をデザイン論として解明することにある。ここに言う「改革庭園」とは、17 世紀以来の歴史主義を規範として造園された大規模庭園を否定し、それらとは対照的に、むしろ庭園に植栽される個々の植物の有機体的特性を重視して、それらと建築や環境との相互作用による感性的で自然的な環境空間の創出を目指した庭園改革の動向を指す。そこでの主流をなすのが、19 世紀半ばの英国で発祥し、まもなくドイツやフランスにも広く伝播した規模の小さな邸宅庭園である。近代庭園史において「改革庭園」という呼称は、そうした近代の庭園改革に対する、いわば時代概念としての総称との理解が定着している。重要なのは、「改革庭園」の展開が、19 世紀以来の品種開発や改良技術の飛躍的な発展によってこの時代に登場する多種多様な園芸植物の存在と不可分に結びついている点である。改革庭園が追求した「自然らしさ」はそれらなくしては実現され得なかった。ではなぜ、そのような植物が「デザイン論」にとって本質的な意義をもつのか。それは、本来的に植物が「動き、内的に生長し、新しい生命を生み出し、外の世界とダイナミックにバランスをとる」生命体であるゆえに、生活世界を構成する多様な関係のうちに質的差異の本質を問うデザインにとって、それ自体が重要な世界の構成要素であるからである。その意味で、改革庭園が植物といかに対峙したかは本研究にとって重要な本質問題と言える。従来、改革庭園が近代デザイ

ンに関連づけられる場合、例外なくそれはデザイン史の視座から世紀転換期の改革運動や工芸デザイン運動の文脈で歴史記述されてきた。それに対して本研究は、近代庭園芸術の研究を庭園史学・園芸史学等、庭園研究の多様な回路へと架橋する可能性をデザイン論に見出し、近代芸術研究としての新しい庭園芸術研究の視座の開拓を目指す。

3. 研究の方法

本研究の方法論的基盤は、庭園芸術を近代芸術の「制作論 (Poietik)」問題として検討する「庭園芸術学 (Kunstwissenschaft)」にある。「庭園芸術学」というこの学術的語法はドイツの庭園芸術研究においてもこれまで用いられておらず、申請者が科研費研究を通してその構築に取り組んできた近代芸術研究の新たな可能性である。すなわちそこでは近代の庭園芸術を具体的に対象とするクロス・ディシプリナリーな基礎研究を前提として、それを芸術学・芸術史的において実証的に根拠づける手続きをとる。「庭園芸術学」の構築に向けては、改革庭園を主導した建築家ペーター・ベーレンス (1868-1940) を最重要と位置づけ、第一次世界大戦前の彼の庭園芸術論と同時代の芸術学 (アウグスト・シュマルゾウ、ハインリヒ・ヴェルフリンら) の相関を一次資料精査によって実証してきた。そしてそこから導出された要点が次の点である。すなわち、ベーレンスの庭園・芸術論が、19 世紀末以来の建築理論が議論を重ねた空間概念論を踏まえた、いわば彼独自の「空間-時間的空間形成論」であるとの理解である。

本研究の方法は、上述の理解を核として申請者がこれまで取り組んできた庭園芸術学研究において自覚された問題点を踏まえている。すなわち、庭園芸術をめぐる問題の諸相は従来、とかく各々異なる水準における研究アプローチによって検討されてきた。たとえば、ベーレンスが第一次世界大戦前後期に集中して主導した改革庭園の実践は、従来、もっぱら 19 世紀末以来の改革運動とヴィルヘルム帝政期の世紀末工芸デザイン運動の文脈で議論される一方、第一次世界大戦前の 1907 年から 1930 年に跨る「芸術学的庭園理論」の形成は、むしろ近代デザインの展開と時代的に並行しているという事実である。そのように従来の研究がそれぞれ異なる水準に位置づけ議論してきた研究のアスペクトを総合的に俯瞰するための一つの視座を獲得する必要性を重視した。「デザイン論」はそのための可能性であると了解される。芸術学・デザイン学研究の立場に立つ申請者を結節点として、園芸・植物利用研究、社会学的庭園研究、庭園の教育的活用等を専門とする研究者の協力を得て近代庭園を多様な回路から検討することで、従来の固定化された庭園芸術研究のアプローチを乗り越えることが試みられる。

4. 研究成果

本研究の成果として、大きく次の二点が挙げられる。第一に、「デザイン」それ自体の問い直しを必要とする視座を獲得したこと、第二に、19 世紀末から 20 世紀への転換期における改革庭園の検討に際して、庭園をつくる行為 (gardening) の重要性を浮かび上がらせたことである。第一の点に関して、とりわけドイツにおける改革庭園期の前衛芸術家 (Kandinsky, Klee, Höch ほか) の活動を制作論的関心から精査すると、19 世紀フランス的ブルジョワジーを身分とした芸術家らとは明確に異なり、彼らのガーデニング行為が自己省察的な芸術制作と生存への問いかけに跨り、双方は表裏一体で相互に切り離せない特性をもつ事実が

解明された。とりわけ彼ら前衛芸術家の自己省察にとり、植物という生命的存在が同時代の自然科学的関心を芸術制作に媒介し、従来の芸術制作への批判とその刷新を促す重要な要因であった事態を看過することができない。彼らにとって自然は客観的に観察する対象にとどまらず、むしろ実践的なガーデニングを通じて直接的に交わるべき存在であった。彼らの行為は、行為に特有の流動性ゆえに、従来「デザイン」を特徴づけてきた「芸術」と「生活」という二項を対立項として際立たせるというよりは、それら双方に跨る「境域」の重要性を示唆し、そのあり方や関係を組み換える可能性を示しているとの新たな気づきである。とかく近代デザインは、制作者が受容者を念頭に制作する生産品を想起させるが、むしろデザインを人間の行為のうちに追究する重要性が自覚されることとなったのである。このことは、本研究の構想段階では明確化されていなかった。そしてこの点には本研究の成果としての第二点目と不可分な重要性がある。改革庭園期の庭園について、それをデザイン論から問うことは、そもそも「ガーデニング」という「行為」が芸術学的・デザイン学的視座においていかなる意義をもつのかへの問いと密接に関連し合っているのである。この知見が獲得されたことは、本研究が基盤とする庭園芸術学をデザイン学と接続させる可能性を拓くこととなる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Fumiko Goto	4. 巻 27
2. 論文標題 Das Weimarer Bauhaus und die Gartenkunst: Ein Reformversuch von Heinz Wichmann	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 BIGAKU (The Japanese Journal of Aesthetics in Western Languages)	6. 最初と最後の頁 26-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 後藤文子
2. 発表標題 「「花壇ひとつを見れば、それで十分なのです」—— クレーと庭という主題をめぐって」
3. 学会等名 国立西洋美術館講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 後藤文子
2. 発表標題 「改革庭園の芸術学的再考をめぐって」
3. 学会等名 論理と感性のグローバル研究センター 2022年度末公開成果報告会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Goto, Fumiko
2. 発表標題 Ostwalds Farbenlehre und die Farben von Pflanzen. Ueber Farbentafeln im Gartenbau
3. 学会等名 14. Dresdner Farbenforum Farbe in der Landschaftsarchitektur und Gartengestaltung（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 後藤文子
2. 発表標題 「最初期バウハウスのヴァルター・グローピウスとデザイン行為 ―― 古典体操から農作まで」
3. 学会等名 第75回美学会全国大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 後藤文子
2. 発表標題 「境域を問う―ドイツ国共和制期のデザイン行為」
3. 学会等名 慶應義塾大学未来共生デザインセンター2024年度末公開成果報告会
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計3件	
1. 著者名 後藤文子（共著）	4. 発行年 2025年
2. 出版社 中日新聞	5. 総ページ数 384
3. 書名 『パウル・クレー展 ―― 創造をめぐる星座』（展覧会図録）	

1. 著者名 Goto, Fumiko (co-author)	4. 発行年 2025年
2. 出版社 Chunichi Shimbun	5. 総ページ数 44
3. 書名 Paul Klee. Solitary and Solidary. Summary and Essays	

1. 著者名 後藤文子（共著）	4. 発行年 2025年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 312
3. 書名 『なぜアートに魅了されるのか』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ヴィンマー (Wimmer Clemens Alexander)		
研究協力者	シュナイダー (Schneider Angelika)		
研究協力者	メツガー (Metzger Folker)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Deutsche Gartenbaubibliothek e.V.	Klassik Stiftung Weimar	Herbarium Haussknecht, Universitaet Jena	